

看護部業務担当婦長としての1年

看護部業務担当参事 岩井 照代

看護部で勤務は始めて、3年が過ぎました。オーダーリングを開始して2年目順調に使用され、今年は検査オーダーを24時間オーダー可能とするため検体ラベルプリンターを導入し伝票レスを図りました。また、電子カルテを中心に放射線科のシステムの導入と、患者認証システム・看護ベットサイド支援システム等の拡大も考えられています。業務の見直しがまだまだ不十分で、研修に参加した職員より院内での統一を望む声上がり、検討会を立ち上げメンバーが快く参加してくれて、感染のマニュアル等の検討を始めました。メンバーの協力を得て現状調査を終了し、インфекションコントロールチームへ移行がされました。事故防止活動も継続してマニュアルの見直し、自己評価、新聞を実施しています。今後は、有効な対策を1つ1つ積み重ねて、実施状況を評価していく必要を認識しています。また今回、事故防止委員会よりの抑制の基準と転倒・転落のアセスメントシートの作成を終了しました。事故報告書の分析内容は、総数平成13年399件、平成14年は520件、平成15年は774件と報告が多くなっている、これは報告に対する抵抗感が薄くなって来たことと、事故防止委員会の事故防止への意識付けが看護職員を変えたと考えます。他の部署も意識改革が出来一緒に事故防止に取り組めるともっと効果が上がると信じています。

内容別では多いものでドレーンチューブトラブルは、14年は133件(25%)で、15年は181件(23%)と全体の件数での率ではやや減少しました。与薬は、14年は120件(23%)で、15年は213件(28%)と全体の件数での比率でも増加している。療養上の世話(主に転倒・転落)は、14年は169件(32%)で、15年は201件(26%)と全件数からの比率では減少している。15年に転倒・転落の研修会を実施し第1病棟では研究のテーマとして取り組むなど、対策を検討している結果と考えます。与薬に関しては薬剤部と看護部での合同の会議を持ち検討しているが、医師も参加した全体の検討が必要です。職場間の意識の違いは報告書件数から知ることが出来、事故防止へのリーダーシップの重要性を感じています。現在、事故防止委員会は積極的に活動しており委員たちは生き生きとしています。今年は、看護研究をして自治体病院学会で発表をさせてもらいました。たくさんのデーターを頂き、感謝しています。

さて、平成16年は病院機能評価受審があり、院内の整備が促進します。看護部も整備を開始していますが、まだまだ見直しが必要です。平成15年の赤字がさらに増強しないように、病院内も変化が起きて来ると考えます。看護部の1員として、自分のすべき仕事を確実に実施していくことが重要です。

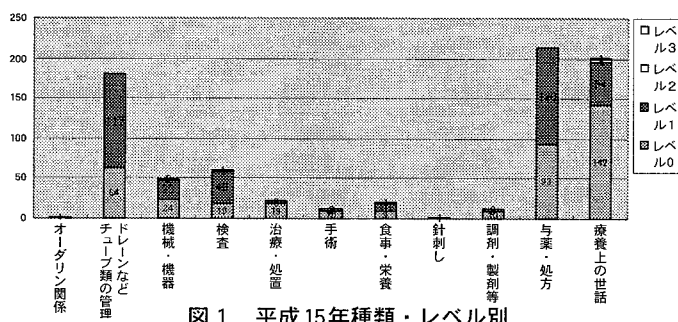


図1 平成15年種類・レベル別

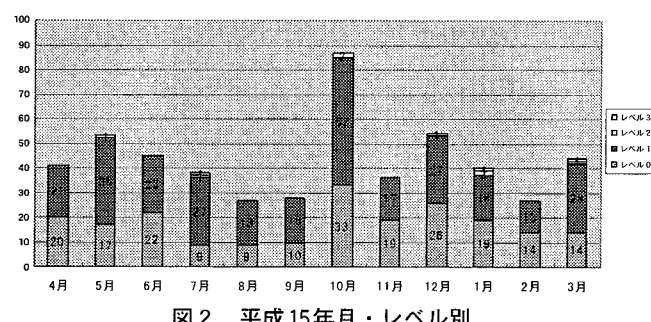


図2 平成15年月・レベル別

表1 平成13年～15年のレベル別報告件数

年	レベル0	レベル1	レベル2	レベル3	総数
H13年	88	179	68	4	399
H14年	212	297	8	3	520
H15年	392	373	7	2	774

レベル別に(ヒヤリハットを0とする)